大学の授業における協同読書の効果

－読者役割の明確化による読書イメージの変容－

平山祐一郎

(東京家政大学家政学部)

キーワード：読書 協同学習 授業改善

The effect of cooperative reading in university class

Yuichiro HIRAYAMA

(Tokyo Kasei University Faculty of Home Economics)

Key Words: reading, cooperative learning, teaching improvement.

目 的

協同的な学習は、思考の広がりや知識の定着に有効であるといわれている。大学においても授業改善の一環として、協同学習の導入が進んでいる。しかし、その成果は運営者や参加者の力量に左右されることが多い。そこで、足立(2004, 2008)が紹介するリテラチャー・サークル(参加者一人一人が明確な役割を担う読書会)を参考にした授業を企画した。これにより、敬遠されがちな読書のイメージを改善し、読書に基づいた議論の面白さを体験することを狙った。

方 法

《調査参加者》大学生(女性)49名。

《手続き》次のように調査は進められた。

第1回:「読書会」の方法の説明※第1調査の実施。

第2回:「読書会」の訓練。

第3～5回:「読書会」1冊目※第5回終了時に第2調査。

第6～8回:「読書会」2冊目※第8回終了時に第3調査。

第9～11回:「読書会」3冊目※第11回終了時に第4調査。

第12回:読書発表会と第5調査。

《展開》1つのグループは3～4人で構成された。1冊の本を3つに区切り3回で読み切った。本を読んで、内容に関して、「絵を描く」役割、「自身の経験や考えにつなげる」役割、「文章表現に注目する」役割を設定し、毎回その役割を交代した。《調査用紙》第1～第4の調査用紙には、守(1986)の読書のイメージを測る3因子の修飾語対(18個)が含まれていた。

第1因子は「読書好感度因子」(「好きー嫌い」「読みたいー読みたくない」「おもしろーつまらない」「親しみやすいー親しみにくい」「ゆかいなーふゆかいな」「近いー遠い」)、第2因子は「読書内容因子」(「大きいー小さい」「ひろびろしたーせまい」「変化に富んだー単調な」「力強いー弱々しい」「のびのびしたーきゅうくつな」「いきいきしたーしずんだ」)、第3因子は「読書行為因子」(「美しいーみにくい」「あたたかなー冷たい」「やわらかいー堅い」「明るいー暗い」「やさしいーむずかしい」「うれしいー悲しい」)であった。他に7個の修飾語対(「深いー浅い」「新しいー古い」「楽しいー苦しい」「未来があるー未来がない」「意味のあるー意味のない」「良いー悪い」「必要なー不要な」)を追加して25対とした。

結 果

第1調査から第4調査までもれなく回答した参加者は39名であった。修飾語対は4段階(1～4点)で評定され、その得点を因子ごとに合計した。第1調査から第4調査まで各因子の合計得点の平均値(標準偏差)は表のようになった。

第1因子合計得点(F1)に対し、一要因参加者内分散分析を行ったところ、有意な差が見られた($F(3, 114)=8.62, p<.01$)。Holm法を用いた多重比較によると、第1調査の値が他の全ての調査(第2～4調査)の値を下回った($MSe=2.53, p<.05$)。

第2因子合計得点(F2)に対し、一要因参加者内分散分析を行ったところ、有意な差が見られた($F(3, 114)=10.17, p<.01$)。Holm法を用いた多重比較によると、第1調査の値が他の全ての調査(第2～4調査)の値を下回った($MSe=2.93, p<.05$)。

第3因子合計得点(F3)に対し、一要因参加者内分散分析を行ったところ、有意な差が見られた($F(3, 114)=10.20, p<.01$)。Holm法を用いた多重比較によると、第1調査の値が他の全ての調査(第2～4調査)の値を下回った($MSe=2.56, p<.05$)。

追加した7つの修飾語対の中で、「新しいー古い」にのみ調査間で有意な差が見られた($F(3, 114)=10.79, p<.01$, 表中*1参照)。Holm法を用いた多重比較では、第1調査の値が他の全ての調査(第2～4調査)の値を下回った($MSe=0.18, p<.05$)。

表 各回の評定における平均値(標準偏差)

	第1調査	第2調査	第3調査	第4調査
F1	18.1(3.0)	19.6(3.3)	19.6(3.2)	19.5(2.9)
F2	16.4(3.0)	18.0(3.1)	18.1(3.0)	18.3(3.3)
F3	15.9(2.3)	17.4(2.8)	17.6(3.0)	17.5(2.7)
*1	2.4(0.5)	2.9(0.6)	2.8(0.6)	2.9(0.7)

考 察

リテラチャー・サークルという読書技法を参考にした読書会を授業に取り入れることによって、読書のイメージ(好感度、内容性、行為性)が改善された。また、読書が古いものではなく新しいものであるという印象変容も見られた。

何らかの学習において、新しい指導法を導入すると、その新奇性から、それを実施した直後には良い印象が高まるが、飽きなどの影響で良い印象は維持されないことが多い。しかし、今回は3冊の本を9回かけて読むという比較的長い時間経過の中で、事前(第1調査)のイメージ得点よりも高い得点とその後の調査(第2～4)で維持されたことにより、この読書法の授業への導入の1つの有効性が確認されたといえよう。

今回は読書のイメージの改善に注目したが、授業(演習)内の協同学習として読書活動を取り入れる以上は、情意的側面のみならず、知的側面の向上が求められる。向上があるかないか、ある場合はどのような向上かを今後捉える必要がある。

引用文献

- 足立幸子(2004). リテラチャー・サークルーアメリカの公立学校のディスカッション・グループによる読書指導方法ー山形大学教育実践研究, 13, 9-18.
- 足立幸子(2008). 読書の魅力を伝える技法ーリテラチャー・サークルー教育と医学, 56(1), 35-41.
- 守一雄(1986). 大学生の読書に対するイメージー短期間の読書課題によりイメージはどう変化したかー信州大学教育学部紀要, 57, 75-82.